

自閉スペクトラム症の子どもを育てる親の養育の特徴

一 養育の概念整理に基づく文献的検討 一

Characteristics of Parenting Children with Autism Spectrum Disorders
: Literature Review Based on the Concept of Parenting

おんせん みゆき おの でら あつこ
温泉 美雪, 小野寺 敦子

<要旨>

本研究の目的は、自閉スペクトラム症の子どもを育てる親の養育の特徴を捉えることであった。分析に先立ち養育の概念整理を行ったところ、「養育態度」、「養育行動」、「養育スキル」の3つの概念が抽出された。この3つの概念毎に養育について文献的検討を行ったところ、養育態度には子どもへの「要求性」と「応答性」の2軸構造が、養育行動には「肯定的」と「否定的」行動が、養育スキルには「環境の最適化」と「行動の促し」が認められた。これらの養育について、子どもが自閉スペクトラム症の場合と対照群との間で比較したところ、一貫した結果は認められなかった。そこで、自閉スペクトラム症の子どもの状態別に養育の特徴を分析すると、子どもの外在化行動の高さと養育における高い要求性、子どもの知的水準の高さと低い否定的養育行動、子どもの生活年齢の高さと低い否定的養育行動に関連性が見いだされた。また、自閉スペクトラム症の子どもを育てる親は、子どもへの接し方や家族のルールを子どもに合わせて調整していることが明らかになった。そして、自閉スペクトラム症の子どもに知的障害があったり年齢が若い場合に限り、子どもに対する適応的な行動の促しは抑制されることが示唆された。さらに、親の教育歴が高い場合に否定的養育行動の少ないことが認められた。子どもの内的適応や外的適応を促す側面のある養育については、子どもの状態の他にソーシャルサポートなどの要因を加えた検討を蓄積することにより、その実態がより明確に示されると考えられた。

<キーワード>

自閉スペクトラム症, 養育, 行動変容意図, ペアレント・トレーニング

I. 問題と目的

1. 自閉スペクトラム症特性のある人が直面している課題

発達障害の一つである自閉スペクトラム症はコミュニケーションの様式が定型発達と異なり、対人相互交流を持つことに困難が生じる。また、イマジネーションに乏しく、こだわり行動が見られたり、生活上のルーティーンを重んじて変化に対応できないことが多い¹⁾。自閉スペクトラム症のイマジネーションの乏しさやこだわり行動は年齢を経るごとに軽減するが²⁾、その症状は皆無にはならず残存する³⁾。篠田他⁴⁾が、自閉スペクトラム症を含めた発達障害のある大学生には時間管理や生活管理に関して高い支援ニーズのあることを指摘しているように、彼らは自由度が高く自己決定を求められる環境で新たな適応困難に直面しやすい。また、自閉スペクトラム症の青年は仲間との違いを認知することにより、抑うつ状態を呈することが示唆されている⁵⁾。さらに、ひきこもり状態を経験して精神科を受診した人のうち3割に発達障害が認められており⁶⁾、自閉スペクトラム症の青年が社会的に適応した生活を送ることができるように支援していくことは喫緊の課題である。

自閉スペクトラム症に対する支援は、療育・特別支援教育・高等教育機関や就労先での合理的配慮の提供を通じて生涯に渡り継続可能であるが、発達期に応じてその受け取り方が異なる。幼児期から高等学校で教育を受けている間は療育や特別支援教育の枠組みのなかで、親あるいは教師が本人の支援ニーズを見いだすことによって支援を受けることができる^{7) 8)}。これとは異なり、高等教育機関や就労先では障害のある本人の申し出により合理的配慮が提供される。近年の我が国における高等学校への進学率は98.8%であること⁹⁾を含め、前述の教育や支援・配慮の実情をふまえると、自閉スペクトラム症の子どもが生涯を通じて社会に適応し自立的な生活を送るためには、高等学校を卒業するまでの間に時間管理や生活スキルを身につけることが求められる。そして、子どもが必要に応じて他者からの支援を求めていくことが重要になる。長年に渡る発達期において継続的に子どもの発達を支援できるのは親であり、親は子どもの支援の移行を円滑に進める担い手であると言える。

2. 自閉スペクトラム症の子どもの親支援

自閉スペクトラム症の子どもを育てる親は、子どもの発達特性ゆえに、一般的な養育では子どもが成長し社会適応することについて成果が得られにくい。このため、親にはストレスや抑うつの高さが認められる¹⁰⁾。また、親のストレスや不安は養育に負の影響を及ぼす¹¹⁾。発達障害のある子どもの親支援にペアレント・トレーニングがある。免田他¹²⁾によると、ペアレント・トレーニングでは行動理論に基づいて、親が子どもの行動の成り立ちを理解し、自らの養育を変えていくものである。そして、トレーニングにより親は養育に関する知識を高め、子どもの行動は変容し、親のストレスや抑うつは軽減することが明らかになっている。ペアレント・トレーニングはおおよそ3歳から10歳までの子どもを対象として開発されてきたが¹²⁾、青年

期には家庭内ルールの取り決めを親主導から親子で調整していくといった対応の変化が求められることから¹³⁾、青年期の子どもの親を対象としたペアレント・トレーニングが国内外で開発されている¹⁴⁾。

ペアレント・トレーニングの効果については、次の限界が指摘されている。すなわち、子どもが注意欠如多動症と自閉スペクトラム症を併存している場合、子どもの行動変容に効果が得られにくい¹⁵⁾。その理由として、自閉スペクトラム症の子どもは、行動のきっかけとなる先行刺激や行動の強化随伴性が親の認識と異なることが指摘されている¹⁶⁾。原口他¹⁷⁾によると、知的障害のない発達障害の子どもに対するペアレント・トレーニングは集団で行われることが多く、また我が国では注意欠如多動症と自閉スペクトラム症の診断を分けずに両者を対象として行われている。こうした現状に対し、自閉スペクトラム症の子どもに対応できるプログラムの開発が求められている¹⁸⁾。

小野寺¹⁹⁾によると、これまでに、養育についての研究は一般の子どもの親を対象に進められており、多様な概念化が行われている。しかしながら、その概念を整理した報告は見当たらない。ペアレント・トレーニングを初めとした親支援を行うにあたり、親の養育の特徴を理解する必要があるが、本論ではその前に養育の概念を整理することにより、養育の特徴を明確に捉えていく。

養育は、英語表記では parenting, parenting attitude, parenting behavior, parent skill, parenting style, discipline という用語を用いて表現される。日本語表記では、養育、養育態度、養育行動、養育スキル、養育スタイル、しつけと表現されることが多い。養育態度とは、親などの養育者が子どもを育てる際にとる態度および行動を意味する²⁰⁾。また、養育態度は信念や価値観などの認知特性と関連しており²¹⁾、態度には行動の準備状態が含まれている²²⁾。すなわち、養育態度は養育行動とその準備性から構成されていると考えられる。スキルとは知の対象についての意識によって獲得されるものである²³⁾。以上を踏まえると、養育態度は養育行動の準備性と養育行動からなる全般的な養育に対する構えを示すものであり、養育スキルは親子の行動を変容させようという意図と養育行動から構成されていると定義できる。図1に、養育態度、養育行動、養育スキルの関係性を示す。

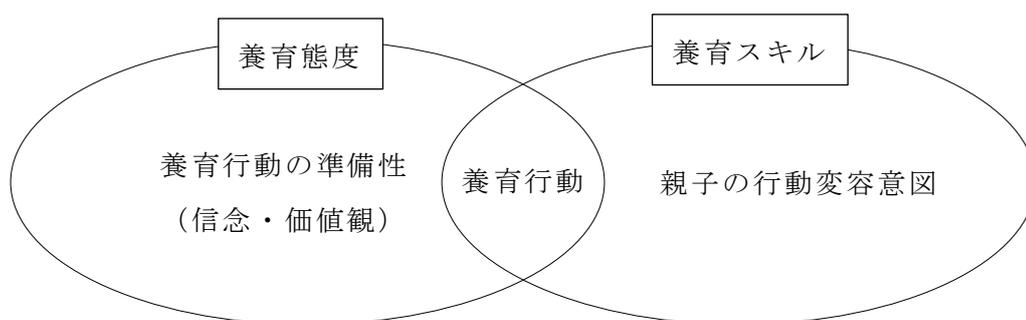


図1 養育態度、養育行動、養育スキルの関連図

これまでに、一般の子どもを対象として、養育態度、養育行動、養育スキルを測定する尺度が開発されている。代表的なものとして、養育態度には「応答性」「要求性」を軸として類型化されるバウムリンドの権威主義的、指導的、放任・無視・無関心、甘やかしの4分類がある²⁴⁾。養育行動には、「肯定的」「否定的」を主な因子構造とし、下位因子として関与・見守り、肯定的応答性、意思の尊重、過干渉、非一貫性、厳しい叱責・体罰の6因子からなる肯定的・否定的養育行動尺度がある²⁵⁾。養育スキルには、道徳性スキル、自尊心スキル、理解関心スキルの3因子から構成される養育スキル尺度がある²⁶⁾。以上のことから、養育は養育態度、養育行動、養育スキルに分類することができるとともに、それぞれの養育について一般の子どもを育てる親を主な対象として尺度化されてきたと言える。

3. 本研究の目的

本論ではこれまでに、自閉スペクトラム症の子どもの生涯発達支援におけるペアレント・トレーニングの位置づけとその重要性を述べてきた。従来の研究では、ペアレント・トレーニングによって自閉スペクトラム症の子ども親の養育が変容したという報告はあるものの²⁷⁾、自閉スペクトラム症の子どもを育てる親の養育の特徴について検討した研究は限られている²⁸⁾。自閉スペクトラム症の子ども親を対象とした効果的なペアレント・トレーニングを開発するためには、その親の養育の特徴を明らかにすることが重要である。そこで、本研究では自閉スペクトラム症の子どもを育てる親の養育の特徴について文献的な検討を行うことを目的とする。この目的に従って、養育態度、養育行動、養育スキルという観点から、自閉スペクトラム症のある子どもを育てる親の養育の特徴を捉えた既存の研究を整理し、その養育の特徴について総合的な考察を行う。

II. 方法

1. 論文収集と分析対象論文の選定

心理学分野の情報データベースである PsycINFO を使用し、主題が「parenting」「parenting attitude」「parenting behavior」「parent skill」「parenting style」「discipline」のいずれかであり、かつ「autism」をキーワードとする査読付きの英語表記の学会誌について検索を行った(2020年10月)。そして、論文のタイトルと要旨および本文から、自閉スペクトラム症の子ども親の養育の特徴について親あるいは専門家による量的評価が行われており、かつ、対照群を設定している論文が8本、比較群を設定していないものの尺度作成に関する論文が2本抽出された。さらに、国立情報学研究所が提供する国内刊行雑誌情報データベース(CiNii)を使用し、「養育」「養育態度」「養育行動」「養育スキル」「養育スタイル」「しつけ」「自閉症」をキーワードに検索を行い、大学もしくは学会が発行している学術論文を抽出した(2020年10月)。その結

果、自閉スペクトラムの子どもの親の養育の特徴に関する1本の論文が抽出された。また、ここで抽出された論文と関連する1本の冊子を対象に加えた。そして最終的に、英語および日本語表記を合わせて12本の研究(11論文・1冊子)を分析の対象とした。なお、抽出された研究のうち、養育の対照群との比較について尺度を通じて行った研究は6本、行動観察を通じて行った研究は2本であった。

2. 分析の流れ

本研究では、表1に示す通り3つの流れで分析を行う。第一に、定義された3つの養育の概念に基づいて養育尺度の特徴を分析する。第二に、尺度によって評価された自閉スペクトラム症の子どもの育てる親の養育の特徴について、定型発達などの場合と比較した結果を分析する。第三に、行動観察により評価された自閉スペクトラム症の子どもの親の養育の特徴について、定型発達などの場合と比較した結果を分析する。最後に、以上の3つの分析に基づいて総合的な考察を行う。

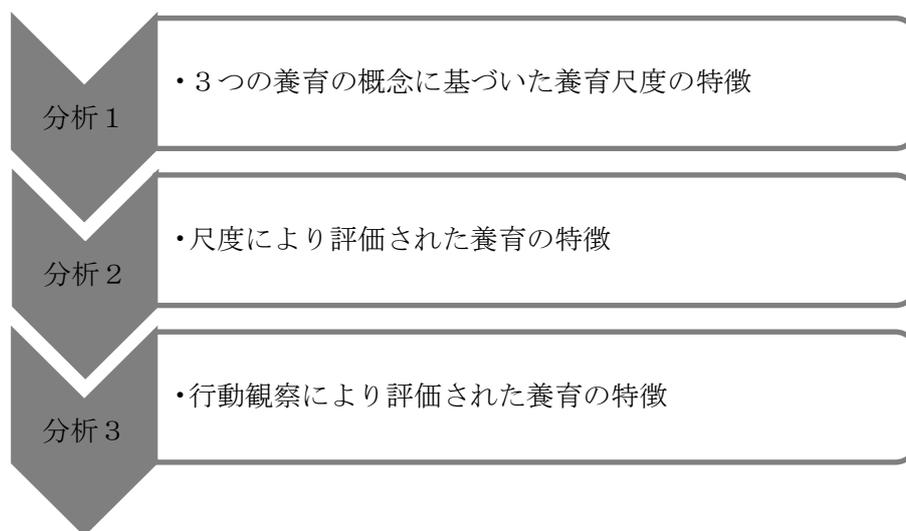


表1 分析の流れ

Ⅲ. 結果

1. 養育尺度の特徴

文献検索により収集された研究には、養育に関する尺度が10本使用されていた。これらの尺度は、その因子構造から「養育態度」「養育行動」「養育スキル」に分類され、その特徴を捉えることができた。表2に、3つに分類された尺度名とその因子名を示す。

養育態度を測定する尺度として、要求性と応答性を構成概念に含む PRPBI²⁹⁾, PSDQ³⁰⁾, PBI³¹⁾が見いだされた。これらの研究では、要求性と応答性が高い養育を「自律的」あるいは「指導

的」, 要求性が高く応答性の低い養育を「統制的」あるいは「権威主義的」という用語を用いて表わされていた。なお, PBI³¹⁾では, 「指導的」「統制的」養育が1つの因子にまとまっていた。養育行動を測定する尺度には, PNPS²⁵⁾と APQ³²⁾が認められた。一般群を対象とした養育行動についてのいくつかの研究では因子構造に相違が見られており, 因子名にも統一性が認められないことを受けて, 伊藤他²⁵⁾は既存の研究の養育行動の因子構造を整理し, 包括的な尺度である肯定的・否定的養育行動尺度 (PNPS) を開発している。そして, PNPS は①養育行動が「肯定的養育」と「否定的養育」から構成されており, ②肯定的養育は「関与・見守り」「肯定的応答性」「意思の尊重」が下位尺度となり, ③否定的養育は「過干渉」「非一貫性」「厳しい叱責・体罰」が下位尺度となる仮説を示し, この仮説を支持する適合度の高いモデルが確認された。養育スキルに関する尺度として, ASD-adopted parenting behavior³³⁾, PSQ³²⁾, PBS³³⁾, インド版 PBS³⁴⁾, General parenting behavior³³⁾ が認められた。これらの尺度には自閉スペクトラム症の子どもの特性に配慮した養育行動が項目に含まれており, 親が自身の行動や家庭環境を調整する「環境の最適化」と, 子どもの発達や適応的な行動を促す「行動の促し」という2つの側面を有している。

表2 養育に関する尺度名と因子構造

養育態度に関する尺度（要求性・応答性を軸とした尺度）

- ・ Parent Report of Parenting Behavior Interventions (PRPBI) : 受容的, 拒否的, 心理統制的, 自律的養育の4因子²⁹⁾
- ・ Parenting style and dimension questionnaire (PSDQ) : 権威主義的, 指導的, 許容/放任的養育の3因子³⁰⁾
- ・ Parental Bonding Instrument (PBI) 中国版 : 愛情的つながり/ケア, 過保護, 指導的統制の3因子³¹⁾

養育行動に関する尺度（養育行動の肯定的・否定的側面を測る尺度）

- ・ 肯定的・否定的養育行動尺度 (PNPS) : 肯定的養育 (下位因子 ; 関与・見守り, 肯定的応答性, 意思の尊重), 否定的養育 (下位因子 ; 過干渉, 非一貫性, 厳しい叱責・体罰)²⁵⁾
- ・ Alabama Parenting Questionnaire (APQ) : 親の関与, 肯定的養育, 監督の乏しさ, 一貫性のないしつけ, 身体的罰³²⁾

養育スキルに関する尺度（親子の行動変容意図を前提とした尺度）

- ・ ASD-adapted parenting behavior : 環境の最適化, 発達の促し³³⁾
- ・ Parenting Strategies Questionnaire (PSQ) : アコモデーション, 強化アプローチ, 不確実性の軽減の3因子³²⁾
- ・ Parental Behavior Scale (PBS) : 肯定的養育, しつけ, 厳しい罰, 物的強化, ルールの5因子³³⁾
- ・ Kannada Parental Behavior Scale (インド版 PBS) : 肯定的養育, しつけ, 厳しい罰, 物的強化, ルールの5因子³⁴⁾
- ・ General parenting behavior : 肯定的養育, 自律性支援, ルールと構造化, しつけ, 報酬, 甘やかし, 助言と安全性の確保³³⁾

2. 尺度により測定された養育の特徴

各尺度を用いて測定された養育の特徴について, 子どもが自閉スペクトラム症の場合と定型発達などの場合とで比較した6本の研究結果を表3にまとめた。すなわち, ①著者(年号), ②自閉スペクトラム症の子どもの特性(年齢, 知的水準, 属性), ③対照群の子どもの特性(年齢, 属性), ④評価尺度, ⑤養育の特徴の5つ観点から結果を整理した。

表3 自閉スペクトラム症の子どもを育てる親の養育の特徴 (尺度による評価)

文献 No.	著者 (年号)	ASD*の子どもの特性 (年齢, 知的水準, 属性)	対照群の子どもの特性 (年齢, 属性)	尺度	ASDと比較対象群の養育の特徴
養育態度に関する尺度を用いた比較					
29)	Ventola, P. et al. (2017)	9.35 (±4.04) 歳 知的水準の記載なし 大学付属の発達障害 クリニックで募集	定型発達の子ども 10.04 (±4.00) 歳 大学付属の発達障害 クリニックで募集	PRPBI	受容的 (応答的), 拒否的 (非応答的), 心理統制的 (要求的), 心理自律的養育 (非要求的) について両群に差なし。 ASDの外在化行動の高さは統制的養育の高さ (高い要求性と低い応答性) と関連していた。
30)	Riany Y. E., Cuskelly M., & Meredith P. (2017)	6.88 (±2.05) 歳 知的水準の記載なし Special School に在籍	定型発達の子ども 6.60 (±2.06) 歳 地域のコミュニティ センターで募集	PSDQ	ASD群は定型発達群より指導的 (高い要求性と応答性) で, 権威主義的 (高い要求性と低い応答性)。ASDの子どもの親は, 定型発達群よりソーシャルサポートが少ないと認知していた。
31)	Gau S.S., et al. (2010)	7.8 (±2.9) 歳 知的水準の記載なし メディカルセンターで募集	定型発達の子ども 7.9 (±2.9) 歳 近隣住民から募集	PBI	ASDの親は定型発達群の親より指導的 (高い要求性) と, 統制的 (低い応答性) が認められた。
養育行動を測定する尺度を用いた比較					
33)	Lambrechts G., et al. (2015)	8~18 歳 IQ70 以下は除外 (親の報告による) 自閉症協会に所属	36.93 (±9.72) ヶ月 (約 3.1 歳) フラマン地域住民	General Parenting behavior	定型発達の場合の方が, 自閉スペクトラム症の場合よりも厳しい罰の得点が高かった。
35)	辻井 (2018)	中規模都市の保育所と 小中学校に在籍し ASD 特性を測定する短縮版 ASSQ 得点が上位 10%	中規模都市の保育所と 小中学校に在籍し, ASD 特性が なく, ADHD**・RS 得点が 上位 10%に入らない子ども	PNPS	ASD 特性のある子どもの親は, 定型発達の場合よりも, 肯定的養育行動が低く, 否定的養育行動が高かった。
養育スキルを測定する尺度を用いた比較					
33)	Lambrechts G., et al. (2011)	8~18 歳 IQ70 以下は除外 (親の報告による) 自閉症協会に所属	定型発達の子ども 8~18 歳 きょうだいが 自閉症協会に所属	ASD-adapted parenting behavior 尺度***	ASD群は定型発達群より発達促進が高い。 環境の最適化は両群に差がない。
36)	Lambrechts G., et al. (2015)	55.37 (±11.21) ヶ月 (約 4.6 歳) 境界知能から 標準域を超える知能 フラマン地域住民	36.93 (±9.72) ヶ月 (約 3.1 歳) フラマン地域住民	ASD-adapted parenting behavior 尺度 General parenting behavior****	定型発達群はASD群より発達促進が高い。 環境の最適化は両群に差がない。

※) ASD は, Autism Spectrum Disorders の略

※※) ADHD は, Attention Deficit /Hyperactivity Disorders の略

※※※) 本論文では "New Scale" と表記されており, 後に "ASD-adapted parenting behavior 尺度" と命名されている (Lambrechts G., et al. (2015) 参照)

※※※※) General parenting behavior は, PBS を改編したもの。子どもの行動変容意図が含まれている因子構造になっている

(1) 養育態度に関する尺度により見いだされた特徴 (要求性・応答性を軸として)

表3に示した3本の研究²⁹⁾³⁰⁾³¹⁾では, 子どもが自閉スペクトラム症の場合と定型発達の場合とで養育を比較していた。その結果, 自閉スペクトラム症の子どもの親が定型発達の場合よりも統制的な養育や指導的な養育をしているというものと³⁰⁾³¹⁾, 養育に差が見られないというものの²⁹⁾に分かれた。自閉スペクトラム症の子どもの状態の多様性を踏まえ, Ventola, et al.²⁹⁾は,

自閉スペクトラム症の子どもの特性と養育の関係を検討しており、自閉スペクトラム症の子どもの外在化行動の高さと統制的養育の高さの関連が見いだされた。また、統制的な養育が高かった自閉スペクトラム症の子どもの親は、定型発達群よりもソーシャルサポートが少なく、ソーシャルサポートの少なさと統制的養育との関連が示唆された³⁰⁾。

(2) 養育行動に関する尺度により見いだされた特徴（肯定的・否定的を主な要因として）

Lambrechts, et al.³³⁾ は自閉スペクトラム症と定型発達の場合とで養育を比較した。その結果、定型発達の子どもの親の方が自閉スペクトラム症の場合よりも厳しい罰の多いことが示された。また辻井³⁵⁾ は、自閉スペクトラム傾向の高い子どもと発達障害傾向の見られない子どもの親の養育について、PNPSを用いて比較した。この研究では、自閉スペクトラム傾向の高い子どもの親は一般群と比べて肯定的養育の得点が低く、罰を含む否定的養育の得点が高いことが明らかになった。前者の研究³³⁾ は自閉症協会に属している親を対象にしているのに対し、後者³⁵⁾ は全国の保育所と小中学校に在籍する子どもの親を対象としており、発達についての相談をしていない場合や自閉スペクトラム症の診断を受けていない場合が含まれている。したがって、2つの研究結果の相違は対象者の属性によるものであり、自閉スペクトラム症の診断を受けたり、ソーシャルサポートを受けていることが、肯定的養育の高さや否定的養育の低さと関連していると考えられた。

(3) 養育スキルに関する尺度により見いだされた特徴（親子の行動変容意図を前提として）

Lambrechts, et al.³³⁾ は ASD-adapted parenting behavior 尺度を開発し、これを用いて、知的障害のない8歳から18歳までの自閉スペクトラム症と定型発達場合の養育を比較している。また、Lambrechts, et al.³⁶⁾ は、同尺度を用いて知的障害も含めた未就学児の親を対象に同様の研究を行っている。これらの研究には、行動の促しに関する因子である「発達の促し」について相反する結果が得られている。すなわち、知的障害がない18歳までを対象とした研究では、発達の促しは自閉スペクトラムの場合に定型発達より高かった。その一方、知的障害を含む未就学児を対象とした研究では、定型発達の子どもの親の方が自閉スペクトラムの場合より発達の促しの得点が高かった。この結果について著者は、知的障害がある子どもや未就学の自閉スペクトラム症の子どもの親はどのように子どもの行動を促せばよいか分からないことが発達の促しの抑制に影響していると考察した。これに対し、環境の最適化についてはいずれの研究においても、自閉スペクトラム症と定型発達の違いは見られなかった。この結果については、対象となった定型発達群の子どものほとんどが自閉スペクトラム症のある子どものきょうだいであったためであると考察されていた。また、ASD-adapted parenting behavior 尺度に両群の特徴をとらえる十分な妥当性の検証をしていないことも結果に影響を与えた要因に挙げた。ASD-adapted parenting behavior 尺度は、現在のところ十分な妥当性を確認できていないが、行動変容を意図

した養育スキルを測定することができるため、養育上の困難に直面しやすい自閉スペクトラム症の子どもを育てる親の養育の実態を捉える有力な尺度であると考えられる。

3. 行動観察で評価された養育の検討

本研究で文献検索によって抽出された研究のうち2本が、行動観察により自閉スペクトラム症の子どもを育てる親の養育の特徴を捉えていた。表4に、①著者(年号)、②自閉スペクトラム症の子どもの特性(年齢, 知的水準, 属性)、③対照群の子どもの特性(年齢, 属性)、④行動評価の基準、⑤養育の特徴を示す。

表4 自閉スペクトラム症の子どもを育てる親の養育の特徴(行動観察による評価)

文献 No.	著者(年号)	ASD [※] の子どもの特性 (年齢, 知的水準, 属性)	対照群の子どもの特性 (年齢, 属性)	行動評価の基準	ASDと比較対象群の養育の特徴
37)	Baptista et al. (2019)	56.79 (±10.79) ヶ月 (約4.7歳) DQ=67.81 (±21.55) 発達センターと大学病院	ウィリアム症候群の子ども 55.50 (±16.18) ヶ月 (約4.6歳) DQ=65.09 (±13.16)	15分の遊び時間における親の子どもへの感受性と協力度を、Ainsworthの感受性協力度スケールを用いて評価	両群ともに子どもの年齢が高いと親の感受性が高い。両群ともに子どものDQが高いと親の感受性と協力度が高い。
38)	Blacher, Barker, & Kaladjian (2013)	35.6 (±2.9) ヶ月 (約3.0歳) DQ=57.6 (±8.7) コミュニティエイジェントで募集	障害群はコミュニティエイジェントで募集。定型発達はプレスクールとデイケアで募集。ダウン症, 知的障害, 脳性麻痺, 定型発達の子ども。障害群と定型発達群はDQを合わせている。定型発達以外は知的障害を伴う	遊び場面と課題場面での親の肯定的関わりと否定的関わりを、Parent-Child interaction Rating Systemを用いて評価	自閉スペクトラム群は定型発達より両場面の否定的養育が高い。障害群や定型発達群においても、両場面で親の教育歴の高さと肯定的関わりの高さに関連があった。いずれの群でも、課題場面において親の教育歴の高さと否定的養育の低さに関連が認められた。

※ ASDはAutism Spectrum Disorderの略

知的障害のある就学前の自閉スペクトラム症の子どもとウィリアム症候群の子どもの親を比較とした研究³⁷⁾では、興味を惹きにくい玩具を与えられた子どもの様子を子どもとは別の行動に従事していた母親がどのように気づき対応するかについて、感受性と協力度の観点で行動評価し、標準値との比較を行った。その結果、両群ともに、ほとんどの親の感受性と協力度は標準値よりも低かった。しかし、両群ともに子どもの年齢が高い場合に親の感受性が高かった。また、両群は子どもの精神年齢が高い場合に親の感受性と協力度が高いことが明らかになった。

Blacher, Barker, & Kaladjian³⁸⁾は、3歳から5歳までの自閉スペクトラム症、ダウン症、その他の発達障害のある子どもとその親を対象とし、自由遊びと課題場面における相互交渉を行動観察した。障害のある子どもにはいずれも知的障害が認められた。Parent-Child interaction Rating Systemを用いて、親の肯定的関わりと否定的関わりを評価したところ、場面毎に異なる結果が得られた。まず、自閉スペクトラム群は定型発達より両場面の否定的養育が高かった。また、いずれの障害群や定型発達群においても、両場面で親の教育歴の高さと肯定的関わりの高さに関連が見られた。さらに、いずれの群でも、課題場面において親の教育歴の高さと否定的養育の低さに関連が認められた。

IV. 考察

本論は、自閉スペクトラム症の子どもを育てる親の養育の特徴を捉えることが目的であった。分析に先立って養育の概念整理を行ったところ、養育には「養育行動」の他に、養育行動の準備性を含む「養育態度」と、行動変容意図を含む「養育スキル」があり、「養育態度」「養育行動」「養育スキル」の3つに分類されることが示された。

そして、自閉スペクトラム症の子どもを育てる親の養育行動には「肯定的」と「否定的」行動が、行動の準備性として「要求性」と「応答性」が、行動変容意図として「環境の最適化」と「行動の促し」が認められた。また、親の教育歴が養育に影響を及ぼす要因の一つであることも示された。さらに、養育は親の要因だけでなく、子どもの年齢・知的水準・外在化行動といった要因やソーシャルサポートの影響を受けていた。本研究で明らかになった養育の構造を図2に示す。

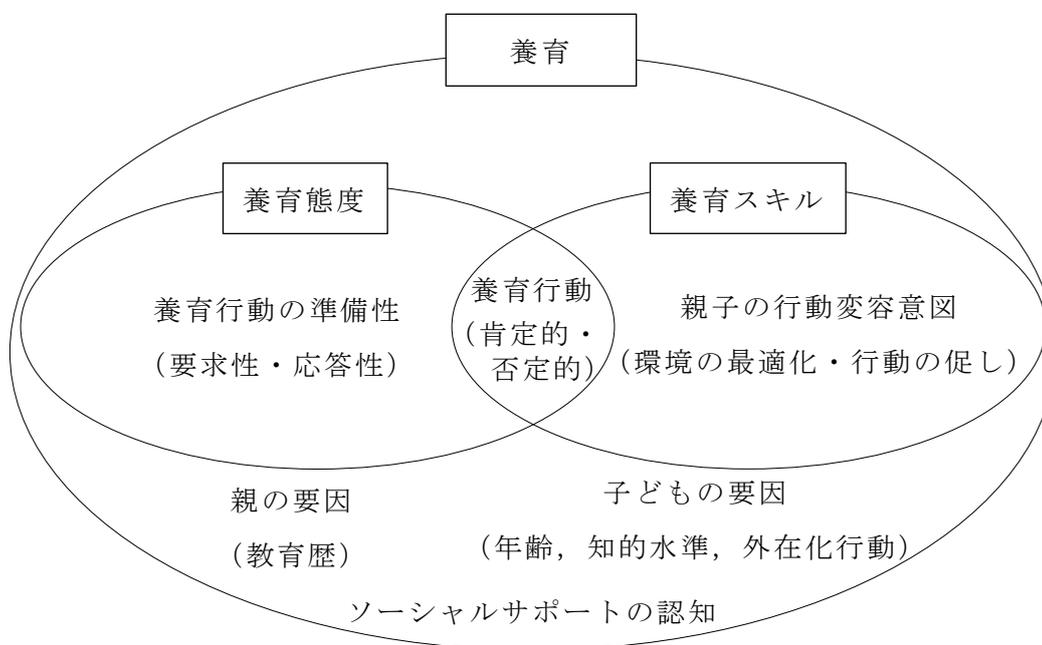


図2 自閉スペクトラム症の子どもを育てる養育の構造

次に、自閉症の子どもを育てる親の養育について、定型発達や他の障害のある子どもの場合と比較した文献的検討からは、以下の2点が明らかになった。

まず、自閉スペクトラム症の子どもを育てる親の養育態度の特徴については、それぞれの研究に一貫した結果が認められなかった。しかし、自閉スペクトラム症の子どもの状態を考慮して養育態度の特徴を検証したところ、自閉スペクトラム症の子どもの外在化行動が高いことと親の子どもへの要求性の高さに関連が見られた²⁹⁾。また、子どもの知的水準の高さや生活年齢の高さは否定的養育行動の低さと関連していた^{37) 38)}。さらに、親の教育歴の高さは肯定的関

わりの高さや否定的関わりの低さと関連が見られた³⁸⁾。養育態度や養育行動に関するこれらの結果をふまえると、子どもの特性に応じた養育を行う方法を親に教育することによって、養育の要求性は子どもに応じたものになり、否定的養育行動は肯定的養育行動に変わることで、さらには子どもの外在化行動を予防する可能性のあることが示唆された。

次に、養育スキルについては「環境の最適化」と「行動の促し」という2つの要因が見いだされた。そして、自閉スペクトラム症の子どもを育てる親は、子どもに知的障害があったり年齢が若い場合に子ども行動を変容しようとする意図を見いだしにくいものの³⁶⁾、子どもへの接し方や家族のルールなどを子どもの特性に合わせて調整していた³³⁾ ³⁶⁾。

以上の養育態度・養育行動・養育スキルに関する結果を総合すると、次のように考察することができる。養育態度には子どもの発達特性に応じようとする応答性があり、これに行動変容意図が伴うと「環境の最適化」という養育スキルとして行動に表われる。また、子どもに適応を促そうと要求する養育態度は、行動意図を伴うことにより「行動の促し」という養育スキルとして行動に表われる。そして、養育の応答性と要求性にはそれぞれ、子どもの内的適応を高める側面と外的適応を高める側面があると言える。内閣府³⁹⁾の調査によると、家庭の役割について、我が国の成人の半数以上が「団らんの場」「休息・やすらぎの場」「家族の絆を強める場」と捉えており、「しつけの場」と考える割合は15%程であった。すなわち、家庭には子どもをしつける場としてだけでなく、家族とともに安心してくつろげる場としての機能も備わっていると考えられる。本研究で見いだされた「環境の最適化」と「行動の促し」という養育スキルには行動変容意図が含まれており、自閉スペクトラム症の子どもを育てる親が自らの養育の応答性と要求性を調整させるための指針になりうる。井上⁴⁰⁾によると、自閉スペクトラム症の症状は成長過程に応じて時系列に変化することから、子どもの年齢を幼児期、学童期、青年期前期、青年期後期などに分けて、環境の最適化と行動の促しのバランスを検討していくことも、子どもの年齢に応じた養育をするうえで重要であると考えられた。

最後に、自閉スペクトラム症の子どもを育てる親の養育との関連性が認められたソーシャルサポートについて言及する。研究報告の一つ³⁰⁾からは、自閉スペクトラム症の子どもの親のソーシャルサポートの乏しさが統制的養育に関連することが示唆された。そして、この結果とは別に、自閉症協会に所属している親は定型発達の場合より厳しい罰の少ないことが示された³³⁾。さらに、子どもの自閉スペクトラム傾向は高いが診断や支援を受けていない親子が対象に含まれている研究では、定型発達に比べて肯定的養育行動が低く、否定的養育行動が高かった³⁵⁾。これらの結果から、子どもに自閉スペクトラム症の特徴がある場合に、親がソーシャルサポートや適切な支援を受けていると、肯定的養育行動の低下や、否定的養育行動を予防できる可能性が示唆された。自閉スペクトラム症には多様な状態像が認められるため⁴¹⁾、子どもの年齢や発達・行動特性あるいは社会適応、さらにはソーシャルサポートなどを加味することにより、より詳細に養育の実態を捉えることができると考えられる。

<引用文献>

- 1) American Psychiatric Association, Diagnostic and statistical manual of mental disorders, fifth edition, DSM-5 : Washington, pp26-29, 2013
- 2) Esbensen, A., et al. : Age-related differences in restricted repetitive behaviors in autism spectrum disorders. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 39(4), pp.57-66, 2009
- 3) 本田秀夫 : 子どもから大人への発達精神医学 自閉症スペクトラム・ADHD・知的障害の基礎と実践, 金剛出版, p103-111, 2013
- 4) 篠田直子他 : 大学における発達障害学生支援 : 限られた資源でどう支援するか (特集 大学における発達障害者支援の展開 : 最前線の現場から), *LD研究*, 28(4), pp. 440-445, 2019
- 5) Hedley, F. & Young, R. : Social comparison processes and depressive symptoms in children and adolescents with Asperger syndrome. *Autism*, 10(2), 139-153, 2006
- 6) 近藤直司 : 社会的ひきこもりと自閉症スペクトラム障害, *自閉症スペクトラム研究*, 10, pp. 37-45, 2013
- 7) 厚生労働省 : 児童発達支援ガイドライン <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000171670.pdf>, 2020/11/10
- 8) 文部科学省 : 高等学校における特別支援教育推進のための拠点校整備事業 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/006/h29/1403755.htm, 2020/11/10
- 9) 文部科学省 : 学校基本調査 <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400001&tstat=000001011528&cycle=0&tclass1=000001021812&tclass2val=0>, 2020/11/10
- 10) Meirsschaut, M., Roeyers, H., & Warreyn, P. : Parenting in families with a child with autism spectrum disorder and a typically developing child: Mothers' experiences and cognitions. *Research in Autism Spectrum Disorders*, 4(4), October-December, pp.661-669, 2010
- 11) Keenan, B. M. et al. : Parents of children with ASD experience more psychological distress, parenting stress, and attachment-related anxiety. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 46(9), pp.2979-2991, 2016
- 12) 免田賢他 : 山上敏子監修, 発達障害児を育てる人のための親訓練プログラム お母さんの学習室, 二瓶社, 1998, p19-35.
- 13) 免田賢・藤原直子 : 思春期の発達障害に対するペアレントトレーニングプログラムの開発に向けて: 文献的考察吉備国際大学心理・発達総合研究センター紀要, 3, pp. 19-27, 2017.
- 14) 温泉美雪・小野寺敦子 : 発達障害に対するペアレントトレーニングの現状と課題ー支援ニーズに添ったプログラムの開発に向けてー目白大学心理学研究, 16, pp. 33-45, 2020.
- 15) 富澤弥生・佐藤利憲・横山浩之 : 高機能広汎性発達障害へのペアレントトレーニングおよび注意欠陥/多動性障害の併存診断の有用性についての考察, *脳と発達*, 45(1), pp. 33-37, 2013
- 16) 中田洋二郎 : 発達障害のペアレントトレーニングー短縮版プログラムの有用性に関する研究ー, *立正大学心理学研究所紀要*, 8, pp. 55-63, 2010
- 17) 原口英之・上野茜・丹治敬之・野呂文行 : 我が国における発達障害のある子どもの親に対するペアレントトレーニングの現状と課題 : 効果評価の観点から, *行動分析学研究*, 27(2), pp. 104-127, 2013
- 18) 神山努 : 自閉スペクトラム症に対するペアレント・トレーニングの研究動向 : 家庭生活中心型のモデルと階層的支援の視点から, *LD研究*, 27(3), pp. 365-372, 2018
- 19) 小野寺敦子 : 親と子の生涯発達心理学, 勁草書房, p11-19, 2014.
- 20) 南博文著, 安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁栞算男・立花政夫・箱田裕司編 : 養育態度, *心理学辞典*, 有斐閣, 1999, p862.
- 21) Luster, T., Rhoades, K., & Haas, B. : The relation between parental values and parenting behavior: A test of the Kohn Hypothesis. *Journal of Marriage and the Family*, 51(1), pp.139-147, 1989
- 22) 土田昭司著, 安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁栞算男・立花政夫・箱田裕司編 : 態度, *心理学辞典*, 有斐閣, 1999, p552.
- 23) 佐々木正人著, 安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁栞算男・立花政夫・箱田裕司編 : 技能, *心理学辞典*, 有斐閣, 1999, p164.
- 24) 小野寺敦子 : 親と子の生涯発達心理学, 勁草書房, 2014, p104-109.

- 25) 伊藤大幸他 : 肯定的・否定的養育尺度の開発 : 因子構造および構成概念妥当性の検証, 発達心理学研究, 25(3), pp.221-231, 2014
- 26) 渡邊賢二・平石賢二 : 中学生の母親の養育スキル尺度の作成 : 学年別による自尊感情との関連, 家族心理学研究, 21, pp.106-117, 2007
- 27) Whittingham, K. et al. : Stepping Stones Triple P: An RCT of a parenting program with parents of a child diagnosed with an autism spectrum disorder. pp.469-480, 2009
- 28) Boonen, H., et al. : Mothers' parenting behaviors in families of school-aged children with autism spectrum disorder: An observational and questionnaire study. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 45(11), pp.3580-3593, 2015
- 29) Ventola, P., et al. : Parenting a child with ASD: Comparison of parenting style between ASD, anxiety, and typical development. *Journal of Autism and Developmental Disorder*, 47(9), pp.2873-2884, 2017
- 30) Riany, Y. E., Cuskelly, M., & Meredith, P. : Parenting style and parent-child relationship: A comparative study of Indonesian parents of children with and without autism spectrum disorder (ASD). *Journal of Child and Family Studies*, 26, pp.3359-3571, 2017
- 31) Gau, S. S., et al. : Behavioral problem and parenting style among Taiwanese children with autism and their siblings. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 64, pp.70-78, 2010
- 32) O'Nions, E. et al. : Parenting strategies used by parents of children with ASD: Differential links with child problem behavior. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 50, pp.386-401, 2019
- 33) Lambrechts, G., et al. : Parenting behaviour among parents of children with autism spectrum disorder. *Research in Autism Spectrum Disorders*, 5, pp.1143-1152, 2011
- 34) Gayathri, K., & Shivani, T. : Adaptation and validation of parental behavioral scale for children with autism spectrum disorders to Kannada. *Journal of Psychological Medicine*, 41(3), pp.266-270, 2019
- 35) 辻井正次監修 : PNPS 肯定的・否定的養育行動尺度マニュアル, 金子書房, p25-26, 2018
- 36) Lambrechts, B. H., et al. : Mothers' parenting behaviors in families of school-aged children with autism spectrum disorder: An observational and questionnaire study. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 45(11), pp.3580-3593, 2015
- 37) Baptista, J., et al. : Maternal interactive behaviors in parenting children with William syndrome and autism spectrum disorder : Relationship with emotional/behavioral problems. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 49, pp.216-226, 2019
- 38) Blacher, J., Barker, B. L., & Kaladjian, A. : Syndrome specificity and mother-child interactions: Examining positive and negative parenting across contexts and time. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 43(4), pp.761-774, 2013
- 39) 内閣府 : 国民の生活に関する世論調査 2019, <https://survey.gov-online.go.jp/r01/r01-life/4.html>, 2020/11/10
- 40) 井上雅彦 : 行動論的アプローチは ASD 治療の到達点として何を指すのか (自閉スペクトラム障害の臨床を問う), *精神療法*, 41(4), 498-504, 2015
- 41) Ousley, O., & Cermak, T. : Autism spectrum disorder: Defining dimensions and subgroups. *Current Developmental Disorders Reports*, 1(1), pp.20-28, 2014